

## 千鳥うちわ 支え合いの新風 江戸の伝統工芸×福祉

## 障害者が職人技を分業、輝く特性

2024年1月26日 07時24分

江戸の伝統工芸品「千鳥うちわ」の製作を、障害者がそれぞれの特性を生かして担う取り組みが進んでいる。職人の高齢化や後継者不足に悩む伝統工芸と、並外れた集中力を持つなどの障害者の特性をマッチング。作品は国内外で販売・出品され、就労支援と収入向上につながっている。



持ち手や形が特徴的な千鳥うちわ=渋谷区で

千鳥うちわは江戸初期に京都から日本橋に伝わり、江戸職人が工夫を重ねた。正式名は「江戸仕立て都うちわ千鳥型」。極細の竹骨が精緻に並べられ、洗練された曲線美を描き出す。



この伝統工芸と福祉をつないだのは、任意団体「クリエイティブ・シェルパ」の共同代表を務める羽塚順子さん（62）＝小平市、写真。障害児教育に携わった経験があり、フリーライターとして全国の福祉施設を取材。職人的な資質があるのに就労に役立てられずにいる障害者の現実を「もっ  
たいない」と思っていた。障害者施設でのものづくり研修や商品開発、情報発信に取り組む中で2017年、千鳥うちわと出会う。関東でたった1人、60年余のキャリアを持つ職人、加藤照邦さん（84）＝埼玉県越谷市＝に「障害者に技術を伝え

たい」と申し出たが、最初は「自分はもう引退する。後には残さないから」と断られた。

千鳥うちわは主に和紙、竹骨と持ち手の3パーツに分けられる。翌年、和紙漉(す)きを前橋市の社会福祉法人一越(ひとこし)会、持ち手の木工作業を府中市のNPO法人フラッグスなどの障害者事業所が担当し、竹骨張り仕上げを加藤さんに頼んで千鳥うちわを合作。

加藤さんが「これは工芸品だ」と認め、技術伝承が動き出した。

20年、自閉症スペクトラムと知的障害がある渋谷区の堀口惇之(あつし)さん(28)が、加藤さんが参加した木工講座で竹骨張りを体験。

約100本の細い竹骨を並べる作業に打ち込む加藤さんの姿に感じ入った堀口さんは持ち前の集中力を生かして技術を学び、竹骨張りの職人第1号になった。

「この作業はうちの息子に向いている」と直感した母親の智子さん(62)は「できないことばかりに視点が当たり、チャレンジする機会さえなかった。息子は千鳥うちわに出合って輝いている」と喜ぶ。

材料の竹は、神奈川県平塚市の社会福祉法人進和学園の障害者が市内の竹林で切り出し、一越会は工程を細分化し重度の人も参加して和紙を漉く。フラッグスでは



糸鋸で持ち手を作るフラッグスのメンバー  
=府中市で(JAPAN MADE 提供)



竹骨を丁寧に並べていく堀口惇之さん=渋谷



糸鋸（いとのこ）作業などが得意な障害者が持ち手の木工作業を担当。20人以上の障害者が作業に関わるという。



和紙漉きをする一越会のメンバー  
＝前橋市で（JAPAN MADE 提供）



竹を切り出す進和学園のメンバー  
（羽塚順子さん撮影）

現在は竹骨張りの技術を加藤さんから受け継いだクリエイティブ・シェルパ共同代表の藤田昂平さん（32）＝写真＝が月に1、2回、作業を障害者に教えている。藤田さんは「可能性を信じて個性や特性を支援する」と語る。

千鳥うちわはクリエイティブ・シェルパのホームページで販売し、ミラノやパリなどにも出品した。

羽塚さんは「本人の才能に周囲が気づき、価値を認めて社会とつなげる。支え合いの社会をつくりたい」と話す。

問い合わせはクリエイティブ・シェルパ＝電 050（3635）9058＝へ。

文・五十住和樹／写真・由木直子

